

藤原宮外周帶の調査

—第201-3次

1 はじめに

本調査は既設水路の改修にともない橿原市の受託事業として実施した。2016年度より継続しておこなってきた調査の最終年度となる。調査地は藤原宮南面外濠と六条大路の間にある外周帶と呼ばれる空閑地にあたり、2018年度に実施した第197-4次調査区の東に接続する(図107)。これまでの調査成果から、調査区は東一坊坊間路の推定位置の延長線上に位置し、先行東一坊坊間路およびその両側溝の検出が期待された。調査区の形状は、南北約2m、東西約97mで、調査区北側の里道に沿って緩やかに蛇行する。調査面積は約195m²である。

2 基本層序

基本層序は地表面から、①表土・耕作土(厚さ0.4~1.1m)、②褐色砂もしくは灰褐色砂(厚さ0.1~0.4m、旧水路の堆積層)、③橙褐色粘質土・褐色粘質土(厚さ0.2~0.6m、土器を少量含む古代の整地層か)もしくは④暗茶褐色シルト(厚さ約0.3m、古代の整地層か)、⑤褐色および青灰色粘質土・砂(標高74.9~75.2m、自然堆積土・自然流路)である。③層は調査区の西端で、④層は調査区中央付近でのみ確認した。なお、調査区内は既設水路による削平が著しく、遺構検出は⑤層上面でおこなった。遺構検出面の標高は74.9~75.2mである(図111)。

3 検出遺構

遺構は、溝4条などを検出した(図110)。

南北溝SD11560 調査区東半で検出した素掘溝。幅約0.7m、深さ約0.2m。埋土は灰色砂質土。先行東一坊坊間路東側溝の推定位置上に位置する。埋土から少量の土器片が出土した。

南北溝SD11561 調査区東半で検出した素掘溝。幅約0.6m、深さ約0.2m。埋土は灰色砂質土。先行東一坊坊間路西側溝の推定位置の約0.7m東に位置する。埋土から少量の土器片が出土した。

東西溝SD11562 調査区中央付近で検出した幅約0.7m、深さ約0.5mの素掘溝。ほぼ正方位に沿って東西に

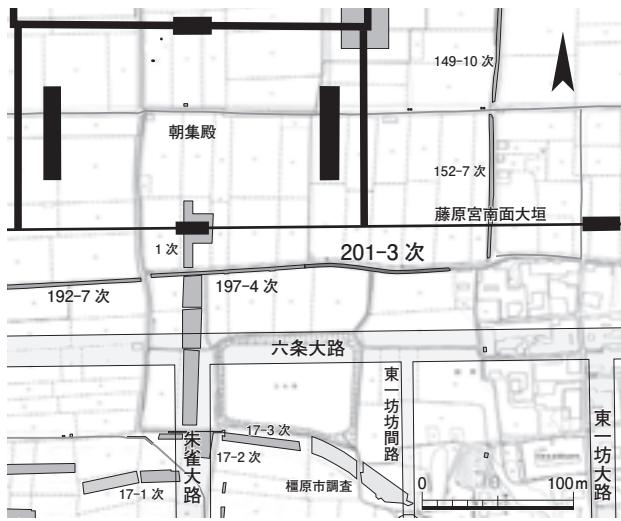


図107 第201-3次調査区位置図 1:5000



図108 第201-3次調査区東半(西から)



図109 SD11560・11561検出状況(北東から)

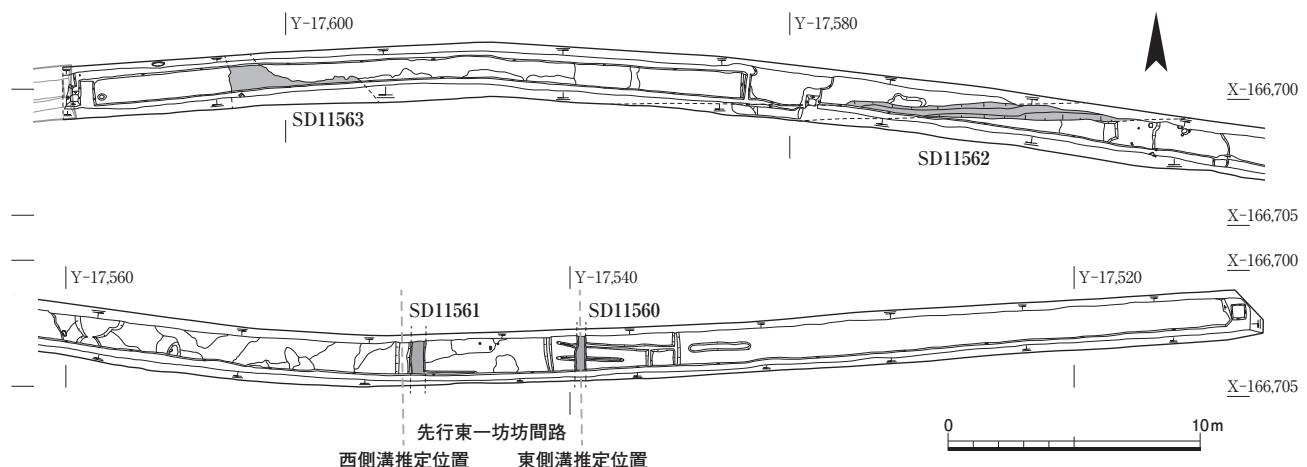


図110 第201-3次調査遺構図 1:300

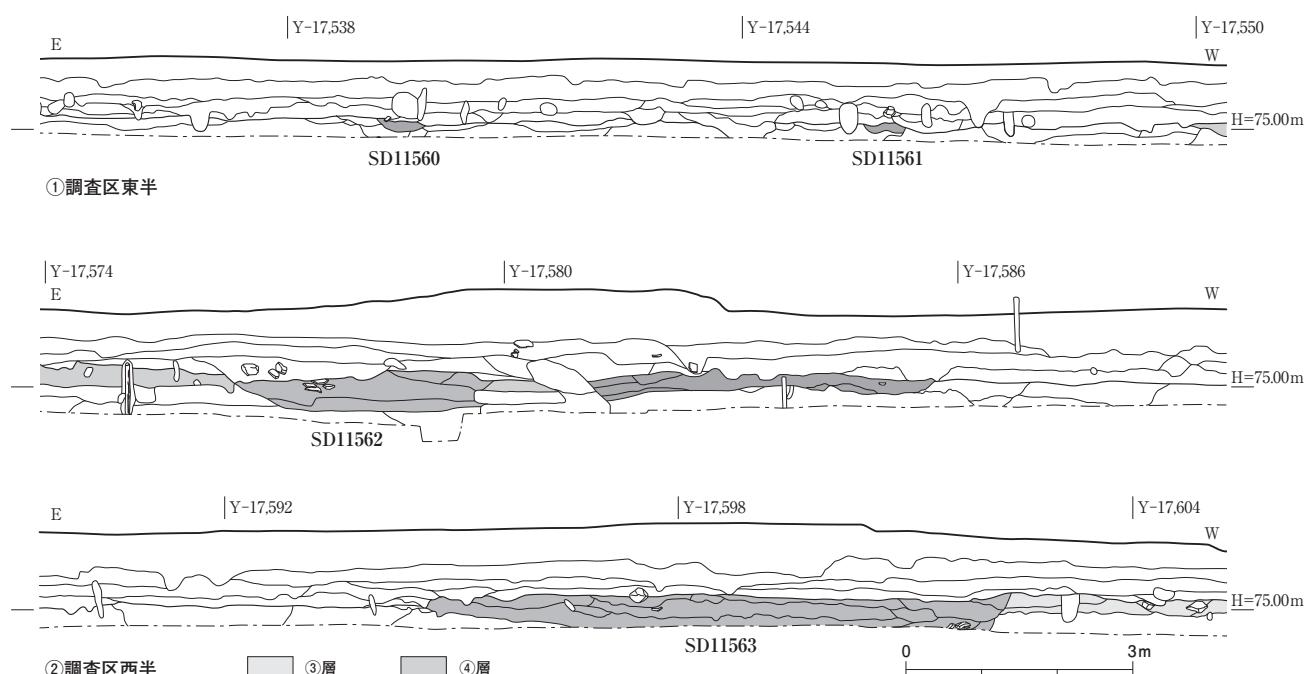


図111 第201-3次調査南壁土層図 1:100

延び、調査区外へ続く。埋土の最下層からは瓦片等が出土した。調査区の南壁の観察では、④層から掘り込んでいると考えられるが、東西溝の直上に近現代の盛土層から掘り込む溝状の遺構が重複しており、両者が一連の遺構である可能性も残る。

溝状遺構SD11563 調査区西半で検出した、③層を掘り込む溝状の遺構。埋土は細砂～粗砂で数回の流水があったものとみられる。平面は不整形で、調査区の南壁で大きく広がる。埋土から藤原宮期の軒瓦と、7世紀末から8世紀前半の土器が出土した。
(大林 潤)

4 出土遺物

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類は表13のとお

り。以下、古代の軒瓦を中心に説明する(図112)。

1は6273C。丸瓦部を欠くが、瓦当裏面の接合溝に丸瓦部先端を深く差し込んだ痕跡が残る。丸瓦部先端の剥離痕跡から、丸瓦部凹面・広端面は未加工の可能性が高い。接合部から瓦当裏面上半に縦方向のナデツケ、下半には縦ないし斜め方向のケズリないしナデを施す。暗灰褐色の胎土に白色の胎土が縞状に混じる。2は6278B。丸瓦部を欠くが、丸瓦部の取付け位置は高く、接合粘土が少ない。丸瓦部先端の加工は不明。瓦当裏面にきわめて丁寧なナデないしミガキを施す。SD11563出土。6647D(5)とともに讃岐宗吉瓦窯産。両者は組んで使用され、本調査区に近い南面中門付近でも出土している。3は6641C。脇区を斜めに1/2程度削り落とす。貼り付け



図112 第201-3次調査出土瓦 1:5

表13 第201-3次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6273	C	1	6641	C	1	熨斗瓦	1
6278	B	1		F	1	ヘラ描き平瓦	2
巴 (近現代)	1		6647	D	1	軒棧瓦 (近現代)	10
	不明				1		
計		3			4		
丸瓦			平瓦			榛原石	
重量	18.7kg		重量	36.6kg		0.4kg	
点数	108		点数	185		1	

削り出し段顎で、顎部の段が低く0.6cm程度となる。胎土に白色の砂粒をやや多く含む。SD11563出土。安養寺瓦窯産。4は6641F。貼り付け削り出し段顎だが、段はやや高く1.5cm程度である。西田中・内山瓦窯産。5は6647D。平瓦部に貼り付けられた顎部と平瓦部凸面の一部のみ出土。顎面および平瓦部凸面の顎部付近にきわめて丁寧なヨコミガキを施す。6・7はヘラ描き平瓦。平瓦凹面に乾燥・焼成前に工具で「+」を刻する。いずれも凸面にナデを施し、縦縄叩きの痕跡を消す。6は凹面に粘土紐の継ぎ目が残る。7は胎土に白色の砂粒をやや多く含む。

SD11563からは、先述の2と3以外にも、軒平瓦の平瓦部と考えられる厚手の平瓦、凸面を非常に丁寧に削る平瓦など藤原宮期とみられる瓦がまとまって出土した。また、SD11562からも、粘土紐作りの丸瓦、平瓦等の藤原宮期とみられる瓦が出土した。このほか、近現代の瓦土坑より近現代の巴文軒丸瓦1点、軒棧瓦10点、大量の棧瓦が出土した。
(清野孝之)

土器・土製品 古墳時代から近代までの土器が整理用木箱4箱分、中期後葉ないし後期の埴輪を含む土製品が1箱分出土した(図113)。

1は土師器杯C。口縁部をヨコナデで調整したのみで、底部外面は不調整。内面には一段放射暗文を施す。

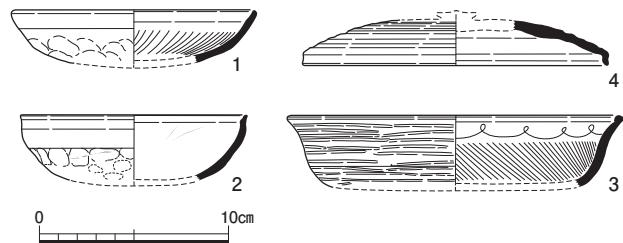


図113 第201-3次調査出土土器 1:4

SD11560出土。2は土師器碗C。口縁部をヨコナデで調整する。底部外面は不調整。内面に工具痕がある。SD11563出土。3は土師器杯A。底部を欠く。口縁部外面をヨコナデで調整した後、外全体にミガキ調整を、内面に一段放射暗文と連弧暗文を施す。SD11563出土。奈良時代前半の平城宮IIに属するとみられるが、飛鳥Vまでさかのぼる可能性もある。4は須恵器の杯蓋。つまみを欠く。口縁部をロクロナデで調整する。頂部外面はロクロケズリ調整。SD11562出土。
(土橋明梨紗)

5 まとめ

本調査区では、既存水路による削平が著しく、古代の整地層は壁面で確認するにとどまり、平面でも遺構の最下層がわずかに残存する程度であった。調査区の東半で検出した2条の南北溝は、先行東一坊坊間路両側溝の推定位置に近く、それぞれ同遺構に対応する可能性がある。ただし調査区内の約2m分の長さの検出にとどまる上に、深さも0.2m程度を残すのみで、出土遺物も少なく、現時点では断定はできない。

また、東西溝SD11562はほぼ東西の正方位に沿っており、もし藤原宮期の遺構であれば、空閑地と考えられている藤原宮外周帶の土地利用について新たな手掛かりとなるだろう。

いずれも今後の周辺の調査成果を俟ちたい。
(大林)